機関誌

ぜんない

令和8年 10月
第82号



石の間に隠れるヨシノボリ

漁業者（会員漁連の傘下漁協組合員）　年間契約［四回発行］定価三、三〇〇円（本体三、〇〇〇円）送料サービス　単品 定価八二五円（本体七五〇円）送料別
漁業者以外の購読者　年間契約［四回発行］定価四、四〇〇円（本体四、〇〇〇円）送料サービス　単品 定価一、一〇〇円（本体一、〇〇〇円）送料別

CONTENTS

全内漁連開催の各会議について
　総務委員会、理事会を開催 ——2
　ブロック会議を開催 ——2
　外来魚対策事業の第１回検討委員会を開催 ——3
　みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業の
　　総合評価検討委員会等を実施 ——4
第 25 回全国川づくり標語コンクール ——6
第 49 回全国養鱒技術協議会 ——8
内水面漁業振興議員連盟の現地視察が開催される ——10
全国内水面養殖振興協会が水産庁長官へ要望書を提出 ——11
我が種苗センター（日野川水系漁業協同組合） ——12
気になる研究結果（国研 水産研究・教育機構水産技術研究所） —14
気になる研究結果（神奈川県環境農政局農水産部水産課） ——16
みんなでやるぞ内水面！（青森県内水面漁業協同組合連合会） —18
アマゴ釣り投稿キャンペーンについて（岡山県農林水産部水産課） ——20
マスの卵は世界をめぐる ——22
「魚食」と「文化」にまつわる戯言 ——24
漁協組合員を紹介します（岐阜県　長良川漁協） ——25
内水面漁協（第 52 回） ——26
愛しきアユ（第 55 回） ——27
漁場生産力・水産多面的機能強化対策支援委託事業 ——28
日光支所から ——29
新会長の紹介 ——30
全内の会員組織変更について ——30
業務日誌 ——30
職員のつぶやき ——31
新聞記事から ——31
編集後記 ——31

全国内水面漁業協同組合連合会

刊行物案内



**新著「マスの卵は世界をめぐる
釣り人の執念と鱒移殖の文化・技術史」**

錦織則政(著)

19世紀から20世紀前半にかけてマス釣りに魅せられた人々が、英国で、植民地で、アメリカで、そして日本で釣りを楽しむために、工夫を凝らしてマスの受精卵を各地に運び入れ、定着させるまでの歴史と釣り人たちの執念に、たんねんな史料発掘で迫った１冊

本体3,600円+税10%　定価3,960円
A5判上製　192頁　2026年6月刊行

問い合わせ先：**築地書館**
電話番号：03−3542−3731
FAX番号：03−3541−5799
HP:https://www.tsukiji-shokan.co.jp/

機関誌 ぜんない 第82号

全国内水面漁業協同組合連合会機関誌
令和8年10月発行

発行人：全国内水面漁業協同組合連合会
　　代表理事会長　谷 公一
編　集：本所　機関誌編集委員会
発行所：全国内水面漁業協同組合連合会
　〒101-0044
　東京都千代田区鍛冶町1丁目10番4号　丸石ビル4階
　TEL：03-6260-9595　FAX：03-5296-2030
　ホームページ：https://www.naisuimen.or.jp
印　刷：鵜川印刷株式会社
　〒923-0053 石川県小松市河田町丁33番地

内水面漁業振興議員連盟の現地視察が開催される

令和8年9月28日、新潟県村上市において、内水面漁業振興議員連盟（会長：野村哲郎参議院議員）の現地視察が開催されました。

ご多忙の中、3名の先生方が参加されました。

・谷　公一　議連副会長（全内代表理事会長、衆・兵庫五区）

・田畑裕明　議連幹事（衆・北陸信越ブロック）

・斎藤洋明　議連事務局長（衆・新潟三区）

また、水産庁増殖推進部栽培養殖課から、冠智昭内水面漁業振興室長、沼田茂仁内水面指導班長が同行されました。

全内からは、谷会長のほか、渡部完副会長理事（兵庫県内漁連代表理事会長）、中奥龍也専務理事が同行し、新潟県内漁連の村山賢二代表理事会長（全内代表監事）に現地でご協力をいただきました。





現地では、最初に三面川鮭産漁協の第3ふ化場を視察しました。このふ化場は、三面川に遡上する鮭の捕獲、採卵、ふ化放流を行うとともに、イワナ、ヤマメの種苗生産やアユの中間育成と種苗の販売を行っているとのことです。また、販売所も併設しており、鮭の遡上シーズンになると、多くの市民が列をなして鮭を買い求めに訪れるそうです。当日は、ちょうどサクラマスの採卵作業が行われていました。

その後、村上市役所の会議室に移動し、新潟県内漁連、三面川鮭産漁協、荒川漁協、村上市、新潟県等を交えて意見交換会を行いました。

まず地元からの説明と要望では、新潟県の本間智晴水産課長から、新潟県における内水面漁業の概況等について説明があり、新潟県内漁連の村山会長から鮭の不漁対策予算について現場が使い易くしてほしいとの要望がありました。

続いて、三面川鮭産漁協の佐藤克雄組合長、大川漁協の菅原光春組合長、荒川漁協の須貝金義組合長から、それぞれ各組合の運営状況や課題について説明があり、組合員の減少・高齢化、遊漁者の減少、災害等による河川環境の悪化等に加え、近年の地球規模の気候変動による鮭の回帰数激減によって、漁協の事業継続が困難になっている窮状を訴え、対策が要望されました。

また、村上市の高橋邦芳市長および臼井信一課長補佐から、漁協運営の改善策として放流事業の随時見直しや近隣漁協の共同運営といった提案があり、市としても中長期的な鮭資源の減少を踏まえ、藩制時代から続く「鮭のまち村上」の伝統を守っていくために、今年から岡山の大学と連携して鮭の完全陸上養殖の研究を開始したとの説明がありました。



その後の意見交換では、参加者から河川工事における環境への配慮や魚道改修の必要性、経営を考慮した増殖目標量の見直し、漁協の収入を上げるための水協法の柔軟な運用、内水面漁協の人材育成や地域との連携など幅広い意見が出され、有意義な意見交換会となりました。

議連の皆様には、現場の声を今後の政策立案に活かしていただくことを期待します。

全国内水面養殖振興協会が水産庁長官へ要望書を提出

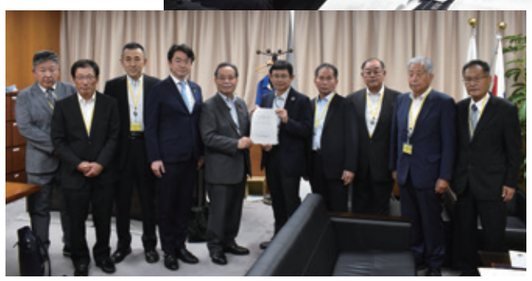
令和8年9月18日、水産庁長官室において、全内の賛助会員である内水面養殖4団体で組織する全国内水面養殖振興協会（全内養殖）が、「内水面養殖における配合飼料価格高騰対策について」として要望書を藤田仁司水産庁長官に手渡し、早急な対応を申し入れしました。

全内からは谷公一代表理事会長と事務局が、全内養殖からは小堀彰彦会長（全国養鱒振興協会会長理事）を筆頭に、木村泰造副会長（全国鮎養殖漁業組合連合会代表理事会長）、加藤明良副会長（全国養鯉振興協議会会長理事）、大和治仁監事（日本養鰻漁業協同組合連合会代表理事会長）、各団体の事務局が出席しました。

全内および全内養殖からは、エルニーニョ現象に起因したペルーのカタクチイワシの大不漁による国際的な魚粉需給の逼迫や円安の影響などから、今後、未曽有の配合飼料価格高騰が見込まれており、内水面養殖業の存続が危ぶまれる危機的な状況にあるとして、漁業経営セーフティーネット構築事業における国の負担割合の引き上げと低魚粉飼料の導入に対する国の支援を強く求めました。また、各養殖業における低魚粉飼料への取り組み状況等について意見交換を行いました。

これに対し、藤田長官からは、「世界的な魚粉不足と配合飼料価格の高騰については、海の魚類養殖の皆さんからも聞いており、大変な問題と認識している。しかし、セーフティーネット構築事業はあくまでも一時的な補填であって、これを未来永劫続けていくことは国の財政的に難しいということはご理解いただきたい。魚粉の不足や価格高騰という状況はこれからも続くと思われ、やはりこの問題の解決は、できるだけ魚粉に頼らない養殖に転換していくことだと思う。国としても試験研究や養殖現場への普及を支援するので、業界としても引き続き努力をお願いしたい。」との回答がありました。





お見舞い申し上げます

令和８年７月 28 日に熊本県の宇城市と八代郡氷川町で最大震度７を観測した熊本地震、また、各地で頻発する豪雨災害において、被災された地域、漁協や組合員の皆様方に、心よりお見舞いを申し上げます。

一日も早い復旧・復興がなされますよう心よりお祈り申し上げます。

全国内水面漁業協同組合連合会
代表理事会長　谷　公一

OKAYAMA GO GO AMAGO!!

アマゴ釣り投稿キャンペーンについて

～遊漁者を呼び込む新たな取組～

岡山県農林水産部　水産課　振興班　主事　髙津広子

はじめに

岡山県は本州の西部に位置し、中国山地から瀬戸内海に注ぐ吉井川、旭川、高梁川という三つの一級河川を有しています。また、支川を含めた水域には、アユ、アマゴ、ウナギ、モクズガニといった様々な水産資源が生息しています。



岡山県の代表的な内水面資源

その中でも、豊かな水域の上流部に生息し、渓流の女王と呼ばれるアマゴは、本県北部では「ひらめ」と呼ばれ、釣りや掴み取りを楽しむだけでなく、塩焼きや甘露煮、味噌煮といった食味としても親しまれながら、地域資源としても利用されています。

しかしながら、全国的な課題と同様に、内水面漁業協同組合（以下、漁協）員の高齢化や減少に加え、遊漁者も減少傾向にあることから、豊かな内水面資源に親しむ機会の減少が懸念されていました。

「やるぞ内水面」で進んだ電子遊漁券の導入と課題

こうした中、令和4年度に水産庁事業の「やるぞ内水面漁業活性化事業」を活用し、県内一部の漁協で電子遊漁券の導入が進みました。これにより遊漁券購入の利便性が向上し、県外利用者や日券の販売数が増えたものの、電子遊漁券を導入した漁協の中には、ホームページや遊漁者に配布できるような管内図を作成していないところもあり、初めて岡山を訪れる方やこれから釣りを始めたい方にとっては、ややハードルが高いことが課題となっていました。

釣り場マップの作成

そこでまず取り組んだのが、釣り場の情報を可視化すること、すなわち「釣り場マップ」を作成することでした。「遠方の方や初心者の方でも釣りに来やすいように」ということを念頭に、県と漁協が協力し、釣り場マップを作成しました。



作成した釣り場マップ（右：表面、左：裏面）

具体的には、

①漁協の各地区の理事から釣りポイントを聞き取りし、現地で釣り場の写真を撮影

②放流魚、天然魚が釣れるポイントを色分けしてプロット

③裏面に一部エリアを拡大表示し、足場の良い「里山エリア」と本格的な「渓流エリア」に色分けして釣り場の写真を掲載

④近隣の公共施設やコンビニなど、目印となる場所を記載

といった、シンプルではありながら、初めて訪れる釣り人のニーズに応える内容を盛り込みました。また、マップ表面には電子遊漁券購入用の二次元コードを併記し、「釣り場情報の取得から遊漁券の購入まで」をスムーズに行えるようにしました。

投稿キャンペーンの開始

マップという釣り場の情報が整った次に、川へ足を運んでもらうためのきっかけ作りとして取り組んだのが「アマゴ釣り投稿キャンペーン」です。なぜ「アユ」ではなく「アマゴ」なのかというと、アマゴ釣りはファミリー層や釣り初心者が参入しやすく、川釣りを始めるきっかけとして適していると考えたからです。アマゴ釣りをきっかけに川に足を運んでいただき、釣りを楽しみながら本県の川の魅力にも触れていただきたいとの思いを込めて、令和6年6月に、電子遊漁券を導入した4漁協を対象に「アマゴ釣り投稿キャンペーン」を開始しました。



作成したチラシ


漁協が用意した景品



県が用意した景品

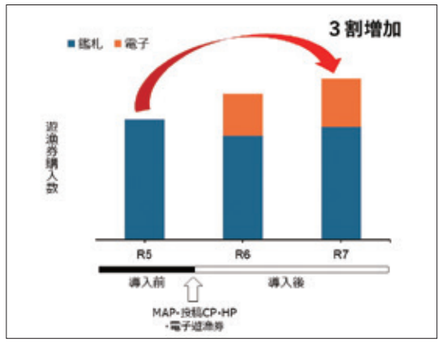
このキャンペーンの仕組みはとてもシンプルで、対象漁協の遊漁券（紙・電子問わず）を購入し、釣ったアマゴと遊漁券の画像を申請フォームから投稿すると、抽選で地域の特産品等が当たる、というものです。景品には、牛肉やアイスクリームといった各漁協の地元の特産品を用意いただき、県からも一部景品を提供、チラシ作成をする形で支援しました。また、投稿に使う申請フォームには、導入コストが不要な県の電子申請システムを活用し、景品以外にはほとんどコストがかからないような運用にしました。

これまでの成果と反響

取組初年度（令和6年度）の投稿者の年齢層を見ると、20代～40代が全体の約7割を占め、その半数以上が電子遊漁券を利用している結果となりました。このことから、比較的若い世代が電子遊漁券を利用し、キャンペーンに投稿していることが分かりました。

続く令和7年度は、他漁協からの要望を受けて対象漁協を4漁協から7漁協に拡大し、3月のアマゴ釣り解禁日からキャンペーンを実施しました。その結果、投稿数および投稿者数は前年と比較してほぼ倍増しました。また、関西圏等の県外の遊漁者からも投稿があり、「一度来てみたくて来ました。初めてのアマゴで感動です」等の反響がありました。

また、既存のホームページ、釣り場マップがなかったA漁協では、取組開始前と比較して遊漁券の販売数が3割増加しました。鑑札と電子遊漁券の内訳を見ると、電子遊漁券の新規利用者が純増しており、新たな遊漁者を掘り起こせていることが分かりました。



A漁協の遊漁券販売実績


投稿されたアマゴの写真

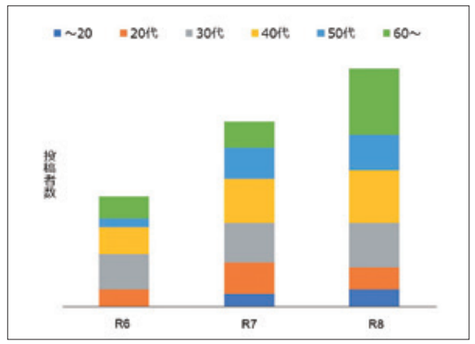
令和8年度の推移と今後

現在、本キャンペーンは3年目を迎えています。今年度は対象漁協をさらに8漁協に拡大し、県と内漁連の共催で「GOOD写真賞」を新設するなど、さらなる盛り上げを図っています。執筆時における投稿者数は前年を上回るペースで推移しており、本キャンペーンに参加する遊漁者の輪が広がりつつあると感じています。

今後は、地域の観光協会などとの連携を深めながらより広く情報発信し、本キャンペーンを多くの方に知っていただくとともに、それをきっかけに一人でも多くの方にアマゴ釣りに親しんでいただき、遊漁者の増加につなげていきたいと考えています。また、キャンペーンを通じて投稿者から得られた「アマゴをもっと放流してほしい」「ルアーを使いたい」などの釣り人の生の声を、引き続き漁協にフィードバックしていくことも大切にしたいと考えています。

最後に、今回ご紹介した本県の取組が、全国で内水面の振興活性化に取り組む皆様にとって少しでも参考になりましたら幸いです。


執筆者が初めて釣ったアマゴ



投稿者数と年齢層の推移